“いつか来た道”

上野昂志

おれはもう一度言葉を信じない
おれは叫ぶことで
おれであることはできない
おれを晒すことで
おれであろうとする
そのとき《十月ノ終リノ風ガ
スサマジク屋根ノ藁ヲ吹キチギ
リダスト
阿母ハ長イ柄ノ鎌ヲモッテ屋根
ニノボリ
風ニムカッテ鎌ヲカザシタ
風ニムカッテ何カ叫ンダ》
おれは言葉でそれを告げる

黒田喜夫「沈黙への断章」

闘争の現場に集まっている全ての人々を叩きだそうとするところから、現場に向かおうとしているものをも阻止しようとするところまで進んできた国家権力の弾圧攻勢は、法律用語に従えば予防検束ということになろうが、一般的に見れば弾圧の日常化ということができるだろう。現場を離れれば、個人の私的生活の次元へ戻ってしまえば、弾圧を避けることができるということはなくなってしまった。車道から歩道へかけあがって人混みにまぎれこんでしまえば一応安全であった昨年11月の羽田は遙かに遠い。無論それは、佐世保以来車道から歩道へと拡がった闘争に対しての権力側の攻勢にすぎないが、なお仔細に眺めれば、生活の全領域にわたって秩序の網をかぶせている国家権力の外化過程にほかならない。

全ての芸術表現についての裁きが、それが秩序を乱すかもしれぬという権力側の予測において始められると同様のことが、ここでも行われる。この時、権力の追跡は、具体的に秩序を犯した「暴徒」であるか、「犯罪者」であるかという点からだけではなく、「暴徒」、「犯罪者」となりうるか否かという、個人の内的側面をも執拗に辿ってくる。

「私は東京・王子のデモで逮捕された学生の母親ですが、息子の拘留中、地元の警察署の刑事に自宅で調書を取られました。署へ出頭せよというのならまだわかりますが、どうして自宅まで押しかけて親の調書を取らなくてはならないのでしょう。私の家は自家営業ですので、主人の仕事を助けて懸命にその日その日を生活している平凡な主婦の私が一体どんな罪を犯したというのでしょう。

はじめは息子さんのことを聞きたいとだけですので、ただ簡単に大学名と下宿先ぐらいだと思っていましたら、だんだん微に入り細にわたりで、主人の仕事ができそうにありませんので、住宅の方にまわってもらいましたら、そこでも上がり込まれて、こんどは私ども夫婦の結婚当初までさかのぼり二十数年の生活の歴史を聞かれました。それがまさか調書となるとは知らず、女の浅はかさで、つい何気な

くしゃべりましたことが、後で全部、何枚かの調書として書取られ、最後に署名せよ、拇印（指紋）でしめくくりというそれは見事なものでした。印鑑ではダメということでした。」

（中略）

「それから、現在の下宿先へ、何度も調べに行くのは当然でしょうが、ずっと前に引払った下宿へも、幾度か警察官が来て困るという知らせがありました。「関係のない人にまでも……」と暗然といたします。こういうことが許されていいものなのでしょうか。」

（岐阜市、43歳の主婦、朝日ジャーナル5・26号、投書欄）

一人の人間を、秩序を踏みやぶったというその行為において裁く法律すらものりこえての国家権力の追跡は、闘争の現場から下宿へ、下宿から故郷の家へと、生活の場全体にまで及んできている。それは、現秩序を否定しようとする者を、その存在の場から根こそぎ奪いとってしまおうとする支配の意志の具体化にほかならないが、その現場から家へと一歩一歩辿っていく過程は、家という原初的な共同体を出発点にして成立した国家の、里帰りの過程でもある。この道を具体的に辿りなおすことにおいて、国家権力が支配の網の強化をはかっているのは当然である。

ところで、支配に対して闘う者の生活の全領域を狙いうつというのは、国家権力の弾圧の一般的なスタイルなのだろうが、地元の警察が「一寸、息子さんのことが聞きたいんだけど」とかなんとかいって家に上がりこんでくるのには、一種独特のものが感じられる。いわば役場のわきの駐在さん、茶のみ話めいた聞きこみというように日常的なものとして、いつのまにか家の中にまで踏みこんでいる権力の奇妙な形。そして、ここでも、自宅まで押しかけて親の調書をとるということに、それは集中的にあらわれている。家で調書をとることは、それ自体違法であろうが、しかしこの形式は違法であるということによっては解決しない内容の独特なあり方をも示している。それは、単に国家権力の攻撃のひとつのあらわれであるだけでなく、その攻撃の論理を、そしてその論理を規定しているこの国の権力の形態をも媒介的に表現しているように思われる。

つまり、家で親の調書をとるという形であらわれている国家権力の攻撃から、権力の攻撃の強化という実質だけをとり出してみても、あるいは、生活の領域に対する直接攻撃という風に抽象してしまっても、その全体の意味はぬけ落ちてしまう。重要なのは、「家で」ということにある。公の場所で、家族をあからさまに攻撃するのではなく、いつのまにか家に上がりこんで、私的な会話と思われるものを公的な調べと結びつけてしまうという、その形式そのものが攻撃の論理なのである。それは、家に的をしぼった攻撃であるのは明らかだが、その攻撃自体が、「家」的論理によって貫かれているのである。国家の基底部分をなしている原初的な共同体としての家の論理が、原理的には国家権力の具体的形態のうちに働いているのである。かつて、支配をのりこえようとした者たちの最初にして最後のつまづきの石が「家」であったのは周知のことだが、それは、「家」が親の悲しみといったようなものとしてだけあらわれたからではなく、国家や組織の内部を家の論理として貫いていたからだと考えられる。そして、そのことは現在でも本質的には変化していないのではないだろうか。

（68年5月24日）

日本思法伝

第31回

作・佐々木守
え・岡本颯子

（一）

キイッ、キイッと、風に千切れる悲鳴のような音をあげて、車軸は廻る。車軸はまわるたびに綱を巻きあげ、その綱は、丸太の上をすべるようにして軍船をひき上げる。

キイッ、キイッ、そのような音はこの河原のいたるところでひびき渡った。

車軸を廻すものは、いずれも足を葛の綱でくくられた唐、及び新羅の捕虜たちである。その異国の囚人にまじって、弓月も黙々と車軸をまわしつづける。

ここ、韓国の錦江河口では、こうして毎日戦いに出た軍船を岸につなぎとめるのが日課になっていた。

急げ！ 見張り兵の鞭がようしゃなく肌にくいこむ。その見張り兵は、百済のものもいたが、日本からつれて来られたものもいた。

この国へ渡ってもう丸二年になろうとしている。二年間、弓月はまるで死んだようになって車軸をまわしつづけて来た。

どどっという騎馬団のひづめの音がする。見張り兵たちの鞭はいっそうはげしく空に鳴った。

「なまけるな！ 揮身の力をふるえ！」

弓月はひづめの音の方へ目を向ける。かけてくる騎馬団の先頭に白くひるがえる布を見る。白布にちがいなかった。しかし、もはや弓月の眼は動かない。鞭の下で、捕虜たちと共に、ゆっくり、ゆっくり河原の砂を踏みしめて、何十度、何百度となくまわりつづけた足跡の上を、また歩く。

「弓月！」

かけて来た騎馬団が止まって、先頭の白布が声をかけた。

「おとなしいな、やけに」

「……」

弓月は黙々として車軸をまわす。

「お前が騒いでくれぬとかえって不気味だ。一体何をたくらんでいるのかな」

白布はしゃべり方にもいつの間にか一軍の将として貫禄がそなわっている。

弓月は依然として答えない。

「玉櫛の子は、元気に育っている。」

日に日に可愛くなっていく」
「……」
「玉櫛もな。どうやらこのごろ、女として花を開いたようじゃ」
一瞬、弓月の足が止まった。が又黙々と砂を踏む。
白布は、爆発したように笑った。
「捕虜共にまじって、うぬは精神まで囚われ人のそれに変りはてたのか。結構！　玉櫛にも左様伝えよう」
ピシリ、馬にあてられるべき鞭が、はげしく弓月の肌に鳴って皮がはじけた。
その血のにじみはじめた傷口に、パッと砂をかきあげて、白布とその騎馬団は、声高い笑い声を残してかけ去っていく。
――おごりたかぶるなよ、白布。おれは忍びだということを忘れるな。たった二年の沈黙で、何で精神まで変わり果てるものか。
そう心につぶやいて弓月は自分のまわりに無数にうごめく人々を眺める。破れはてた唐衣を風になびかせた捕虜たちの黙々とした労働がそこにある。
唐人たちよ、おれの味方はお前たちだ。そうではないか。支那大陸に生れたお前たちが何のためにはるばる韓国まで戦いに来なければならぬのか。そして、日本人、倭の民が何ゆえもって海を渡ってこの国まで、あんたたちと刃をまじえに来なければならぬのか。
キイッ、キイッ、車軸はまわる。
重苦しい韓国の夕方であった。
六六一年暮、唐は将軍劉仁軌を韓国に派遣し、新羅の将軍金庾信と共に、百済に対しはげしい攻撃を加え、六六二年に入って支羅城・偽真峴城の二城を攻め落した。
同じ年の春、中大兄は百済皇子・豊璋に、狭連檳榔、秦造田来津をつけ、兵五千と共に韓国へ送った。
百済にあって孤軍奮闘して来た鬼室福信は久しぶりに相まみえた皇子豊璋と手をとりあって喜び、百済軍の士気は大いに上がった。この時、中大兄は将軍、阿曇連比邏夫に託して矢十万、糸五百斤、綿一千斤、布一千端、なめし皮一千張、稲種三千斛を送った。
六六二年五月、豊璋は錦江の河口近く、周留城において、阿曇連比邏夫立ち合いのもと、百済王即位の儀式をとりおこなった。
同年十二月、豊璋と福信を中心とする百済軍は、周留城を出て南下し避城に移った。このとき、日本軍の秦造田来津との間に、攻撃と防備についての意見の対立が見られた。
しかし南下した百済軍は、ただちに反撃に転じた新羅・唐の連合軍のため、たちまち、居列城、居斯勿城、徳安城を陥され、避城は孤立の浮き目に立たされた。
六六三年二月、豊璋と福信は再び周留城ににげ帰った。
しかし同年三月、九州長津宮にあった中大兄は、将軍上毛野君稚子に二万七千の兵を与えて韓国へ急行させ、かくて日本の韓国派遣軍は三万二千の大軍となったのである。そしてこの第二次派遣軍の中には、かの蝦夷征伐で勇名を馳せた阿部比羅夫も加わっていたのである。
これに対し、唐の高宗は劉仁軌、劉仁願の二将軍に新たに七千の兵を増援部隊としてつかわし、新羅の文武王は自ら大軍をひきいて錦江めざして出発した。
時に六六三年夏――百済・日本連合軍と、新羅・唐連合軍は、錦江の河口をはさんでまさに一触即発の機会を待っていたのである。

（二）

「中大兄はどうしてスメラミコトにならなかったのかしら」
つぶらなひとみに、毒をはらんだことばで額田王はいう。
「兄上はずるいのだ。スメラミコトになって、やはり権力を欲しがっていたのだと人々にいわれると、ソンをする、そう思ったからさ」
大海人は暗い気持で答える。岩を打つ波の音のみがものうい、九州の夏。大海人と額田王は、砂にまみれた身体で岩の上にころがっている。
近頃、おれは、どうもあの長津宮にいることが息苦しく感じられてならぬ。別に何をいわれるわけでもなく、怒られるわけでもないのに、大海人は中大兄の目が、顔が、声が何故かこわくてならない。妙に強制的な、おしつけがましさを感じるのだ。
それは、国として百済救援にのり

出したという大義名分にのっとり、そのための方策を次々とうち出す中大兄に対し、心の底では批判的な気持を持っていることの、ある後ろめたさであったのかもしれない。
もう二万二千もの大軍を波路はるかな異国へ送った。中大兄は異国ではないふるさとだという。しかし、そんなことはもう遠い昔のことなのだ。大海人にはどうしても、感覚として韓国と日本とが同じ兄弟国だとは思われない。
筑紫、筑後、肥後、伊予、讃岐、備後、陸奥——そして西日本のほとんどすべての国々から元の国造の命により徴発されて、船にのせられていった農民たちの、あの無気力な姿が目に残っている。
いやだいやだとあばれまわり、泣き叫んでくれた方がどんなにかまだ気が休まったことだろう。
いま、まるで、日本全国から人がいなくなってしまったかのような、自分ひとりがポツンととりのこされてしまったかのような、けだるい虚無感に大海人皇子は襲われている。
だから、その虚しさをうずめるように、額田王の身体を抱く。昨夜中大兄の腕の中であらんかぎりの媚をつくして来た身体とわかっていても、大海人には、額田ののめりこむような肌の白さを忘れることができないのだ。
「いやよ、砂のついたままでは。傷がつくもの」
そんな大海人の手をピシャンと叩いて額田はケロリとしていう。
「スメラミコトにならず、スメラミコトと同じ仕事をする。ほんとにずるいわね、中大兄様」
「そう、ずるい、兄上は」
「でも、そんなずるさがなければ、スメラミコトになれないのかもしれないわね」
天皇になるべき人間が即位せず、皇太子のままで政務をとることを、「称制」という。六六三年は、中大兄の「称制二年」にあたる。
「額田は、おれにも、兄上と同じようにずるくなれというのか」
「いっても、なれる? あなたに」
「……」
血を分けた兄弟だというのにこうもちがうものであろうか。兄の中大兄は、すでに大化改新のクーデターにおいても見られた如く、あらゆる権謀術策をつかっても、自分の考えをぐいぐいとおしすすめていく男だ。しかし弟の大海人は、よくいえばひかえ目、悪くいえば、優柔不断でずるずると兄のあとにひきずられて行くといったタイプであった。
額田のことにしてもそうだ。中大兄にはっきりと抱かれていることを知っても、それを怒ることもできず、又きっぱりと手を別つこともできず、まして中大兄に談じこむことなど考えも及ばず、ただずるずるとひとときの快楽のみを求めて自堕落に額田の肉体におぼれていくのである。
追いつめられる、このままでは。
——一年ほどもまえから大海人はそんな思いにつきまとわれる。いつか、額田からはっきりと手を切るといわれる時が来そうな気がしている。そうなったとき、自分はいったいどん

な態度がとれるであろうか。
　大海人の足元にゾロゾロとしていやな感覚があった。みると一匹のカニが大海人の足のふくらはぎを這っている。そのカニをつかまえて、力一杯岩にたたきつけようとして、ふと大海人は思いとどまる。
　岩の上に、心ゆくまで夏の太陽をあびてせい一杯両手両足をひろげた額田の、そのふっくらとした乳房に、大海人は衝動的にカニの鋏をおしつけていた。
「いたい」
　額田はとび上がった。そして大海人の手にあるカニを見つけると、一瞬、美しいひとみにはげしい怒りの色をただよわせたが、次の瞬間、そのカニをひったくるようにとると、岩の上にたたきつけた。
　そして、更に、そのカニを力一杯ふみしめて、そのまま一気に海へ向かってとびこんでいった。
　青い波の飛沫に、額田の裸身がきらめくようにはね、そして長い黒髪が、まるで夢の中の光のようにひろがるのを見るとき、大海人はそのはるかかなたの韓国を思い、その水平線の上に、巨大に立ちのぼる蜃気楼を見たように思った。
　それは次代の天皇、若き中大兄皇子のまぼろしにちがいなかった。

（三）

　唐・新羅連合軍の当面の改撃目標は、百済五豊璋と、将軍福信、及び日本の第一派遣軍のたてこもる周留城であった。
　劉仁願と文武王は陸路を周留城に向かい、一方劉仁軌は水軍と糧船を編制、能津から、錦江の河口、白村江へ向かった。
　一方、阿部比羅夫を中心とする日本軍第二次派遣隊は、大きく朝鮮半島を迂回して、これまた錦江河口の白村江へ向かって軍船を進めていた。
　そのころ、周留城の兵士たちの中に一つの噂がささやかれていた。それは将軍・鬼室福信が、百済王璋に対して不満を持ち、ひそかに謀反をくわだてている噂であった。
「百済滅亡の危機にさらされた時、たったひとり闘ったのは福信だ。だから人民の信望も福信に集まっていた。あとで来て王となった豊璋にはそれが煙ったいらしく、そのことをいちはやく察した福信の方も、豊璋に対して謀反のくわだてをしている」
　噂は一応もっともらしくうけとれた。たしかに豊璋が長い人質生活を終えて百済へ帰りついたとき、豊璋と福信は手をとりあって喜びあったのだが、その後の豊璋は、噂のとおり百済国民の信望を一身に集めている福信をあるねたましさでみつめていたことは事実であった。福信に対する恩賞が少なかったこともそれを裏づけていた。豊璋にしてみれば、それは戦いの中のことゆえやむを得なかったこととれもいえるのだが、内心あるうしろめたさを感じていたことはいなめない。
　そこへこの噂である。噂はどこから発生したのかつまびらかではなかったが、またたくうちに周留城のすべてに拡がっていった。女官たちのひそかな物語りも、あるいはそのことを話しているのではないかと、豊璋はいつか疑心暗鬼にとらえられていった。
　うだるような暑さがつづいた。唐・新羅の連合陸軍はひたひたと周留城に迫りつつあった。
　その日弓月はひとり車軸をまわしながら、微笑した。二年間、待ちに待った時が来たのである。噂の源は弓月にあったことは勿論である。弓月が唐人捕虜に話し、それが少しずつ輪をひろげていったのだ。
　また、騎馬の群れの走る音がする。鬼室福信の手勢が、唐・新羅連合軍との闘いに出ていくのにちがいなかった。
　一瞬、弓月は叫んだ。「福信様、お待ち申しておりました」その声を待っていたかのように唐人捕虜たちがさわぎ出した。
「福信様！」
「今が時です」
「起って下さい！」
「援軍はそこまで来ています」
　綱にしばられつつ、唐人たちはかたまって叫びつづけた。見張り兵がとんでくる。しかし唐人捕虜の声は無気味に周留城にひびきわたった。
　鬼室福信はとつぜんのこと茫然となってさわぐ唐人捕虜を見つめていた。
　白布のひきいる騎馬軍が疾走して

来た。「しずまれ！　しずまれ！　斬るぞ！」
　馬蹄が、鞭が、刃が、唐人捕虜をじゅうりんする。その中にうずくまりながら弓月はもう一度微笑む。「白布、みておれ、二年間唐人捕虜の中に生きたおれの反間の術だ」

　福信はただちにとらえられた。豊璋の目はにくしみに燃えていた。「福信、余はそちを無二の忠臣と信じて来たぞ」
　「陛下、私に二心はありません、これは何者かのたくらみでございます。陛下！」
　福信の手のひらには穴があけられ、そこに革のひもが通されて天井からつり下げられていた。したたる血は福信のうでをつたわり、衣服を赤く染めた。
　「陛下！　思いとどまり下さい」白布と田来津はそばから進言する。
　「今、陛下と福信の間にみぞが出来て喜ぶものは一体誰か、よくお考え下さい」
　しかし、怒る豊璋の心はおさまらなかった。
　「どけ！　白布！」
　豊璋は手を上げた。見上げるほどの大男が巨大な刃をかまえて進み出た。
　「陛下！」
　そのとき、大男の白刃は鬼室福信の首を一気にたたきおとしていた。
　白布は、噴き出す血潮の中に百済の真の滅亡を見た。
　「謀反人をうちとったぞ」大男は、福信の血のしたたる首をつかんで、城の高楼にかけ上がった。「わーっ」というときの声が——どこからも起きなかった。城中の官吏たちも兵たちも、ただ暗い目でその首をみつめただけであった。
　「田来津」白布がいった。「本当に謀反がおきるかもしれぬ。人民も兵たちも、豊璋に対し誰一人心を開こうとせぬ」
　「わしもそう思う」田来津の声は暗かった。「やむを得ぬ。豊璋は白村江にいる日本軍にうつってもらおう」
　その夜、闇にまぎれて豊璋は周留城をぬけ白村江へ奔った。
　と同時に、周留城をひたひたとかこんでいた唐・新羅連合軍の一斉攻撃が始まった。その中で、弓月は、唐人捕虜たちと共にひそかに燈火でしばられた綱を切っていた。
　そして——やがて周留城の内から、紅蓮の炎がもえ上がった。国王なき王城は、たちまちのうちに敵の足にふみにじられた。
　弓月は白布の姿を求めて燃えさかる城中を走りまわった。白布、お前のふるさとで、今まですべての勝負一気につけようぞ。走る弓月は、そのとき、どどっと一隊の女官たちが城を脱け出すのに気づいた。
　「玉櫛！」
　その女たちの中に弓月は、幼児を抱いた玉櫛の姿を見つけた。
　「どこへいく、玉櫛」
　「弓月」
　玉櫛は一瞬立ちどまった。
　「出雲族の女が、韓国の女にまじってどこへ行く」
　「いいえ、私は、この国の女の人たちと、同じ血の子どもを生んだ女です」
　「まて、お前の行くところはただ一つ、白雲、八雲たつ出雲の地ではないのか」
　「ああっ　イズモ！」
　悲鳴に似たことばが玉櫛の口からもれた。
　「そうだ、イズモだ！」
　その時、もう一団の女たちが悲鳴と共に走り出して来た。
　「許して、弓月、私はこの地に果てます」
　いうやいなや玉櫛は女たちと共に走り出した。
　「まて、まつんだ、玉櫛」
　「いいえ、私は出雲を裏切った女です。さようなら」
　周留城のすぐ前は断崖となって錦江の波が洗っていた。
　弓月は、その断崖から、ひきも切らず散っていく美しい花びらをみていた。

（四）

　白村江でも激戦はつづいていた。数百の軍船の間に矢がとびかい、白刃がきらめき、白村江の水は赤く染った。
　田来津も阿部比羅夫の姿ももはやなかった。死した日本兵の服をまと

った弓月は敗色濃い日本軍の船にまぎれこみ、次々と火を放った。百済の船もまた燃えた。みるがいい、わが出雲を陥した騎馬の民よ。今こそ海上の闘いの不利を知るがいい。そして、征服したものが、征服されたものの心の底に燃える怒りを知るがいい。

燃え上がる業火の中で、弓月は、北をさしてにげていく数隻の船をみつけた。それは、百済王豊璋と、その家来たちの船であった。小船にうちのって弓月はその船を追う

「弓月、ついに来たな」

舷側から叫んだのは白布であった。

「にげるのか、白布」

「にげるのではない。ここから高句麗へ行き、更に北のわが父祖の地へかえるのだ」

「やらぬぞ、白布！」

一瞬、弓月の足は小舟を蹴ると、鳥の如く空へ舞い上がり、そのまま白刃となって白布の上へ降った。

「弓月……」

我に返ったとき、その足元には朱に染まった白布の姿があった。

「海へ……潮の流れにのって、大陸の岸へ流れつくやもしれぬ」

そういうと白布はガックリと首を折った。

弓月はじっと白布をみつめた。好敵手ここに死す。まるで走馬燈のように熊野の山を下りてから今日までのことが、一瞬のうちに弓月の瞼をかすめてすぎた。

その耳に遠い潮騒のような歌が聞こえる。

八雲たつ
出雲、白雲
海にたつ
七重　地の雲
八重　天の雲

うたに重なって、オオオン　オオオンと耳をゆるがすばかりのひびきがよみがえった。それはあの銅鐸の妙なるしらべである。

おお！　イズモ！
わが、イズモ！

果して、おれは何をして来たのか。弓月はがっくりと膝を折った。騎馬の民が、韓国と日本列島に築こうとした騎馬連合国家の夢は今ついえさった。しかし、日本における騎馬民族の征服王朝は依然として残っている。おれは一体何をして来たのか。

若菜死し、玉櫛死し、そして今白布も死んだ。残ったおれは——おれも、歳をとった。にわかに十も二十も老けたような気がする。

かかえ上げた白布の身体が手に重い。それを力一杯海に葬ると、弓月は静かに目をつぶった。

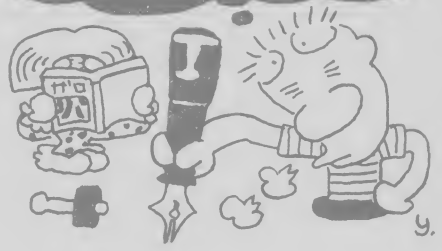
日本海の鼓動がこころよくつたわってくる。この大きなうねりの中から、いく重にも、いく重にも、つみ上げられるようにわき上がる白雲が、やがて一つの巨大な神殿をつくり上げてくれる。そこには朝も昼も夕もも、絶えることのない銅鐸のひびきがある。

こらえきれぬ空虚さと、胸を襲う哀しみの中で弓月はいつか叫んでいた。

おお、出雲！
おれの出雲！

それは弓月の、永遠に見果てぬ夢への呼び声のようであった。

そして日本はやがて中大兄の天智朝を迎えるのである。

（第二部　終）

素直で素朴な感想を

鶴谷　美恵子（神戸）

本欄ではどうしてあんなに小むずかしいことをいうのでしょうか？　読者のための頁をつくられてから、あのような風潮になったみたいです。べつに否定しているわけでもありませんが、前々から別世界の芸術品を大きく批評しているような感じを抱いていました。

6月号で小山氏、山崎氏たちの言わんとしていることは、私の現在も抱いている気持と同じです。哲学めいたことばを使うエリートたちには、たまにこんな批評もいいのではないかと思いますよ、まったく。

しかし、本欄は「ガロ」の作品を批評し合うんでであって、先月号でこの人がこういったけど、それは間違っているとか、私はこう思うんだから、あの人の意見はいけ好かないとか、他人の批評を批評してみたって「ガロ」は向上するでしょうか？　私には、山手環状線のようなものだと思えますが……

創刊号当時の読者コーナーを見て、現在の本欄と大幅に内容が違うなと思いました。そして、その雰囲気もです。以前の読者たちは、ほとんどが子どものようですね。その文面、文面に着飾ったところがなく、素直で素朴だと感じられました。台湾に住む読者のパイナップルの話……。あれは、ほほえまざるを得ないこころよい雰囲気がありました。

そういった感じとは裏腹に、現在の本欄は批評闘争の火花を散らしているようです。たしかに高いものを見つめあって、互いに意見を交換し合っているのはいいんですが、本当に自分たちの感想を素直に語っているのでしょうか。

少し長くなりましたが、「ガロ」がほとんど青年、大人たちのためにあるなら、子どものための「ガロ」のような内容をもつ漫画を発刊なさって下さいませんか？　現在、商業主義雑誌が氾濫している中で、何よりもそのような漫画のあることはいいことだと考えます。月刊漫画「ガキ」ぐらいなタイトルをつけて……。

「カムイ伝」の冒険をかう

張　幸子（大阪・21歳）

最近「カムイ伝」に対する批判が強くなってきた。私自身つまらなさを感じる時もあるが、また第一部連載の段階ゆえ長い目で見たい気がする。それに「カムイ伝」の存在しない「ガロ」はやはり物足りない。つげ、滝田氏等の作品には確かにすぐれたのもあるし、私も好きだが、だからといって白土氏不在の「ガロ」を背負って立つに充分な魅力があるかどうか疑わしい。

「カムイ伝」の出来不出来など私は問題にしない。なぜなら白土氏が「今までの忍者的発想から脱皮」（深沢氏）しようとしてかいた最初の長篇作だからである。いつまでも忍者中心で新しい術を開発していれば格別の不満も受けないかもしれないが、それでは本当のマンネリに陥ってしまう。「カムイ伝」は、ある意味では冒険作である。「ガロ」が発刊されなければ恐らく生れなかったかもしれない。

白土氏とて人間だから常に新しい冒険や実験を試みるなかでは、スランプもマンネリもいわゆる思想や表現力の限界も現われてこよう。今さら「思想の枠ゆえの限界暴露」とか「公式的偏向」云々は私にはおかしい気がする。（もともとこの世に完全無欠な思想の作品などあるはずはないのだから。）それとも彼らは白土氏を完全無欠だとでも買い被っていたのだろうか？

漫画に限らず、古今東西文学の世界においても、そういう欠点をもつ作品が指摘されている。それにもかかわらず、それらが今日読まれているのは、作者の矛盾や限界を越えて訴えるものが多いからではないだろうか。（だからといって「カムイ伝」もそうだというつもりはないが、白土氏がまさしくかきたかった、もしくはかこうと努力した点を私は買いたいのだ。）

もっとも、これほど批判が集中する理由として、「カムイ伝」の連載が長いということもいえそうだ。人間三年もたつといい加減倦怠感におそわれるもので、まして三年以上も毎月おなじみの人物にぶつかっていたら、飽きてくるのも当然かもしれない。

しかし、私にも腹の立つ批評がある。いわゆる哲学的（？）文章の引用や使用による批判である。作品が順調にいっている時には悟りきった史観論を得々と述べ、つまらなくなった（彼ら流にいえば）途端に掌を反して、高所から見下すごとく批判する。こういう「風の中の羽のように」よく変る心理など、私には理解できない。（こんなスピード時代にじっくりと待ってなどいたら新しい波に乗り遅れてしまうとでも思うのだろうか。）

多くの人は白土作品中「影丸伝」を

代表作と推しているようだし、私も反論はしない。ただ「影丸伝」の成功した理由のひとつには、発刊された当初は「カムイ伝」のように強い期待や先入観はあまり持たれていなかったと思う。

戦後二三年の傷痕描く

三輪　政克（東京・19歳）

「ガロ」における本欄がたんなる投書欄ではなく、読者の批評と論争の場である、と思うからこそ一言述べさせて頂く。批評というものはその対象となる作家達のはらう努力や真剣さ誠実さ苦脳と少なくとも同等のそれらを持ってせねばならぬのだ、と。作品のアラを探し、また感情的な反発によってけなす、といった手口は三文評論家の常套手段であるけれどもそれはけして批評でも何でもない。

たとえば6月号本欄の藤田氏は、するどい政治風刺の林静一、ファンタスティックな佐々木マキ、といともあっさりと定義づけてしまったが、これはあまりに軽卒ではないだろうか。林氏の作品には毎号多くの示唆をうけとっているが、それはたんなる政治風刺のワクの中だけで収まるものではない。それは、戦後二三年の日本民族の傷痕の生々しさを伝え、我々の内に残る傷の認識のための努力であり、それを政治主義的な公式を排除し、あくまで「人間」の側からとらえようとする努力であると私は見る。当然そこに内包されるものはたんに政治的な命題にのみ限られていない。

同欄の山崎氏の批評等でどうも不評をかこっているようである池上遼一氏の『風太郎』も林氏とオーヴァラップする部分を持っている。私はこの作品をきわめて興味ぶかく読んだ。欠点を指摘することはたやすいがその前に私達はこの初老の男を気違いにしようとしているものは何か、という提出された疑問について真剣に考えてみなければいけない。それを私達に強いるだけの力をこの「ブルドーザー」のような作品」は持っている。そして私達もこの作品でいう「気違い」になるべきだ。という作者の意思が読みとれる以上、それに対するギリギリいっぱいの真剣さと誠実さを持ってせねばこの作品に対して一言一句も批評めいたことは語れない。

林氏の作品にせよ佐々木氏の作品にせよ同じ事が言える。またこれらの一群の作品、「ガロ」において「難解」といわれる作品群がいわゆるマンガのワクを超えようとしている事をも考えるべきだ。たとえば前衛ジャズが、モダンジャズから出発しながらモダンジャズファンからも難解と呼ばれながらもモダンジャズのワクを超え、今完全に芸術としての音楽の本質を持ち始めてあえてジャズと呼ばれる必要がなくなってきているように、これら一群の作品はあえて漫画と呼ぶか呼ばぬか、といったような質問を無意味とする段階に来ていると思う。

「ガロ」とはそうした動きを担ってきた雑誌であったし、現在もそうであり、これからもそうあるべきだと思う。漫画をあくまで漫画のワクの中で追求してゆくことも大事だ。しかし「ガロ」の場合作品の価値は必ずしも漫画のワクの中のみでおしはかられるのではない。そこにこそ「ガロ」の価値があり、上述の諸氏や白土氏、つげ氏といった秀れた作家の出現を可能ならしめたのではないか。たんなる好き嫌いや安易にわかるかわからないかで、これらの作品の価値を云々してはいけない。好き嫌い程度の動機でこれほどの作品が書けるわけはないからだ。安直な批評の真似事は作家達の生への侮蔑であり、同時に批評する人と「ガロ」との両方の品位を下げることにしかならない。

つげ義春の絶望感

池田　順秀（東京・19歳）

つげ義春氏の作品についての意見が活発なようだけれども、いかんせん皆さんは彼の作品の本質を見落しておられるようだ。マンガは面白くなければいけない、という自己目的化された俗的な認識（それでなくてもつげ氏のマンガは面白い）を排斥せねばならない。マンガを読むことは、僕たちにとって自慰的な快楽ではいけないわけですから。

彼の作品を随筆マンガと規定し、彼を田園マンガ家として公式化するほどたやすいことはないが、問題はもっと根深いことを僕は敏感に感じとる。というのは、彼の作品の主人公は、いつも二重の疎外感を持った人間であるからである。放浪する彼は、都市生活からはみ出した人間である一方、田園生活をも彼のオアシスとしてとらえることのできない絶望感や被害者意識があり、それがつげ氏にとって大きなテーゼとしてとらえられていると思う。

素朴な人々との交流も、自然と時間の制約のなかでは一つの体験でしかあり得ないし、日本的な伝統、西洋的な文明から隔絶した世界との決定的な断絶が徐々に描かれていく。彼の自我意識を越えたところに自然というものが暴露されていく。そこに彼の作品のモチーフがある。

白土三平氏のように単純明快な論理構成で階級意識をふり回されるよりも、つげ義春氏のほうにより類的存在としての人間を発見するのである。このことは、今や巨大な想念となって僕を圧倒しつつある。

漫画論評

つげ義春への遠方からの手紙

左右田本多

つげさんのマンガはぼくにとって一体なんなのでしょうか。様々の銃口から撃ち放たれたつげマンガ小論などを斜読みなどしてきても一向に焦点が定まらず、ぼくの肉体は血を流しません。謎の宇宙電波同様、正体不明なのがつげマンガの特質なのでしょうか。それにしてもなぜ論者たちがつげ論において襟を正すのでしょう？

しばらく前に友人と屋台で飲んだとき、つげ義春氏に一言伝えることを約束しました。それは、つげマンガがいよいよ白昼の舞台に押し出され、広く読み込まれて雑多に料理されるという季節にあって、固有の危機を感じての成り行きでした。この一文をモノにしなければならない直接のきっかけも、そんなところにあります。

さて、つげ作品のあれこれを念頭に浮かべ、それらに共通な表情を手さぐりしていくと、作家つげ義春の歯ぎしりのようなものが、まず聞こえてきます。そして〃しまった〃という舌打ちの音が続きます。

なにが〈しまった〉のでしょうか。

ぼくは数少ないつげ作品のうち三十編ほどの長短編を読んできましたし、処女作を発表した年（昭28年）の「戦雲のかなたに」も入手しました。最近では「沼」（昭40年10月作）において一つの転機を迎え、「李さん一家」（昭42年3月作）で頭髪の光の反射をシロで描出し、乾燥したセンス・スタイル・リズムを定着させたのを見てきました。（この白ぬきの反射を採りいれた意味と、そのために真暗闇の地下水道での怪魚を視覚的に穿った「山椒魚」（昭42年2月作）が先行作品として必要だった意義とは、留意するに値します。）――こうした足跡は一つの発展・進歩という財布に納めてコト足りるでしょうか。

読者や第三者からの視角は別にして、作家にとっての己は、いま・ここの自分（作家・作品）だけであって、立ち止まり振り返っても、また前方を見やっても、存在するのはこの実存のみ――そしてそうしたいま・ここの反復の残像が未練がましく想起されるだけです。こうしてマンガキャリア十五年のつげ義春の頭蓋骨には、折につけ不透明な思念が飛び交うことでしょう。なんのための十五年？（「今日のため」なんて言うのは他者のみ。）一挙に今日があってもよかったのでは？　その間とり逃がしてしまった貴重な余剰は？　その手落ちから仕返しされている？　手直し不可の十五年間の重みは？……ここに〈しまった〉という実感がつげさんの胸中に忍びこみ、死角となり、小鬼のように住みついていると思えてなりません。

この〈しまった〉は後悔なんてありふれた代物ではなく、苛立ちにまぶされた砂を噛む気配のことでしょう。だからそこには、なんらかの衣裳をまとった恥の襞が一枚加わっているに違いありません。そして未来形も〈しまった〉と先取りしている（か）。

――こんな序の口からつげさんと交通の場が持てたらと思います。すべては仮象の試行のレール上をつっ走らなくてはならないのですから。

＊　＊　＊

かつてマンガの古典を掘りあてようと、古今東西のマンガ鉱脈に目を配ったことがあります。そのときはめっけ物がなかったものの、最近ふとしたことから日本のマンガ――鳥羽絵に出会いました。そして、この十八世の約百年間、主に京阪に流行った鳥羽絵マンガは〃世界マンガ史の唯一の古典〃だと、かたくなに信じたのです。ぼくがいう古典とは、あらゆる鑑賞（形成）をゆるすと同時に、唯一の批判（場所）だけを享受（表出）できる・読みこみ自在の作品のいわれですが。

人影から発案されたとされている鳥羽絵では、大のおとなが不自然に長く細い手足を縦横に泳がせて、無理無体におどけてみせていますね。この足裏までみせたその力み方からは、真面目くさった作家たちの翳りが陰萎にうかがえます。みんながみんな、物の怪に取りつかれたみたい――。

このおどけ絵の一枚一枚にその作家たち（大岡春朴、長谷川光信、竹原春潮斎、松屋耳鳥斎など）が封じ込めた息吹はなんだったのでしょう？　ぼくがみるところ、一口にいって呪いです。八方塞りの陥穽においやられた先人たちは、孤独と狂気の隙間風から、やる方なく呪いの翼をひろ

げたのです
　鳥羽絵の主人公＝庶民たちの目玉はクロ丸で、その口は鳥の嘴そっくりですが、この鳥口を大きく開けて、死んだ眼光をむき出すさまは、ボッシュのあやかしの世界と一脈通じ合います。彼の愛玩物＝生き人形たちは、その裂けた大口から声なき声で未知の虚数をまき散らして、現在まで生き永らえてますね。ブリューゲルとなると、鬱血を化膿させるまでは師ボッシュに見習いながら、そのウミの切開にとりかかり、そこから開示された未来の光明を垣間見てしまってか、その作中スターたちは口を閉ざして黙々と幻想エネルギーを溜め込んでしまいます。だからブリューゲルは、捨て身のボッシュにどうしてもかないません。
　ボッシュが現在から未来にかけてますます復権証書をふやしていく片側で、痩せこけた踵にやけっぱちな物の怪を一頭くっつけた鳥羽絵の哄笑は、墓場にツバして現在までこだまし続けています。だれが一体この好漢――呪詛者を現代的意匠のもとに復活させるでしょう?
　閑話休題。思うにつげさんは、この世で最も劇性の強い毒をあおってしまったのではないでしょうか。自分の仕事が納得できればできるほど、この湿った世の中のいやらしさを裏から支えてしまうという業の覚醒を。どこからか手に入れてしまったこの猛毒のために、恥入らざるをえない作家生活。この恥の射程距離は、つげさんの力が及ぶ範囲で絶対の真理なのでしょう。
　こうしてつげマンガは、産みたくない親から生まれてきた多くの鬼っ子と似た相貌をもってきます。佳作の数々が作家の悪感をかすかに漂わす……。ここには、なんにも期待しないけど、絶望もしないという、ぼく(ら)の性癖と類似の二面獣がどっかり腰を下しているといっていいでしょうか。
　つげマンガを離れてつげ義春はなく、またマンガ作品においてつげ人物もないという、虚無と実存の可逆的な摩訶不思議な世界が突出し、同時にこのマンガ＝つげに仕返しされ続けてきたのが、マンガ作家としてのつげさんの独歩だったと、感じられてなりません。そこには歴史や自然の軸がはいってくる余地はないのです。
　恥をなめつくしたとき、筆を折ることなくもう一度マンガに逆撃し、なにかを取り返し、仕返し返していけるかどうか――ここにつげマンガの固有の分野がさらに展開されていくかどうかは知るよしもありませんなにしろ、つげさんが変形して隠しもっている撃鉄とつるまないからには、どんなデテールも生きてこないのですから。

※　※　※

　水木しげるは一昔前、かなしみに充血した作品を書きちらして、古典の入口までせせり出たかにみえました。しかしそれも束の間で、彼は甘美なカンフル注射で若がえり、居心地いい別天地へ巣立ったようです。心根やさしい若手の有望株・林静一は精神分析学などのエセ幻想物に心を奪われがちです。
　彼らの遺失物である悲哀と心遣りの融合点に、ケシの花の蠱惑をもって呪詛の沈黙が結実します。呪われるべきは、赤面で受け流してますます恥辱の上塗りに精を出して平ちゃらな・われら人間獣、絵空事の人柱。こうなっては我田引水のそしりを承知で、つげ義春に呪いの古典作家の役を演じてもらう他ありません。鳥羽絵の正統な継承者――つげさんとは、また見事なとってつけではありませんか。その精神の母胎において、ボッシュ→鳥羽絵→つげマンガとつなげるのも愉快なことです。
　伝説ではつげさんは霞とイワナを食って生活しているとのことですが、今年のマンガ界はこの三十歳の仙人あるいは世捨人に席巻されるかにみえます。それは霞をたらふく食う余裕に作用することでしょうし、愛敬者で最も被加虐性に富んだ諸々の物の怪も退散し、彼らがわいてくるかわたれ時が淋しくなることでしょうということはつげさんにとってなんなのでしょうか。
　従前の大半の作家たちは脚光をあびてはめまいをきたし、今までのマイペースさえおぼつかなくなるばかりか、さらに半歩刻みに後退していくのが、世の常です。それは宙づりの綱にとり残され、旧作以上の力作を読者から要求される作家の定めとされています。突然変異で作品が変貌し、その自己変身はまた当人にとって意味をなさないつげさんにとっては、そうした要求は不当なものでしかありません。ただ、他人が動機がないまま作品を量産化している彼岸で、乗り気の稀薄のまま苦笑いしながら作品を書いたり書かなかったりしているつげさんには、つげさん固有の課題があることだけは確かでしょう。
　この〈固有性〉追跡あたりから端を発して、またそこに舞い戻った作業が、先に友人と感じ合ったあんばいでしたし、この手紙もまたそうした循環の連動でした。それらはいってみれば、生身のつげさんをいつでも信じたいという願望とのつき合いでした。要するに、信頼が作家への、好みが作品への最後の切り札であるぼく(ら)の無償無臭の確認行為にすぎなかったわけです。せめても副産物として、芸術制作の前段階の核心に一切を引きつけたかったのですが、それもままならず――。（某日記）